マリリン　モンロー

　マリリン　モンローの最期を知る男（ミシェル　ジュネデール）が河出書房新社（２００８年）からに出版され、精神分析医のラルフ　グリーンソンが描かれている。また２００８年１２月に新世紀の精神科治療（新装版５）現代医療文化のなかの人格障害（新宮一成　加藤敏　担当編集、中山書店）の内容と妙に符号するところがあります。この教科書のなかに（自分を承認させたいという承認の欲望のもとに医師ないし医療機関にたいし自己の権利を濫用する）という箇所があって、どうやらモンスターペイシェントのことに触れているのです。患者と精神分析医の間のことはすでに教科書で書かれているから、ある程度のことは分かりますが、人格障害者の治療をおこなう精神科医が困っている事例があることを知り、専門家がお手上げなら、そうでない人たちはどうすればいいのかと思っていました。マリリン　モンローと精神科医の間にどのような確執があったのかは分かりませんが、彼女が死を迎えて決着する以外にとる方法がなかったのかもしれないです。彼女の場合は突発的な死だったのでしょが、自分の死への道を演出する事例があることを知り、なぜなのかと思っておりました。単にうつ病で解釈できるものではなさそうです。
　人間は一人一人違うので、どのような人に遭遇するかで、人の見方が異なってきます。出あったこともないような人間を理解することはほとんど不可能です。

---

16 歳の頃、モデルとしてデビューしたマリリン・モンローは、少しずつ映画にも出演するようになり、20 歳でハリウッドの映画会社と契約したのをきっかけに、本名のノーマ・ジーン・ベイカーから「マリリン・モンロー」へと名前を変える。

1951 年の「イヴの総（すべ）て」に出演したのをきっかけに、後（のち）にアメリカ映画界を代表する大スターとなった。

たが 1962 年、36 歳の若さにして自宅で不審な死を遂げた。睡眠薬の飲み過ぎによる自殺という結論となっているが、自殺にしては不審な点が多く、当初から他殺説が浮上しており、死の真相は依然はっきりしていない。

▼遺体発見

1962 年 8 月、マリリンはロサンゼルスの住宅街に最近購入したばかりの豪邸で生活を送っていた。

8 月 5 日、午前3時 30 分、**家政婦がマリリンの部屋の灯りがまだついているのを見つけ、ドアをノックしてみた。しかし返事がない。**

マリリンはこの当時、精神的に不安定になっており、狂言自殺を行っては、誰かに電話で助けを求めたこともある。精神科医に診察してもらっていたような時期だったので家政婦は心配になり、**家の外に出てマリリンの部屋を覗いてみた。するとマリリンが全裸でベッドの上に横たわっている。**

嫌な予感がした家政婦は、すぐにマリリンのかかりつけの精神分析医であるグリーンソン医師を呼んだ。
10 分後の3時 40 分、**グリーンソン医師が到着して遺体を発見し、その後に同じくマリリンの主治医であるエンゲルバーグ医師が到着し、彼女の死亡を確認して警察に通報した。**

▼死の数時間前

遺体の発見は 8 月 5 日、午前3時 30 分。
前日の 8 月 4 日の夕方、マリリンの自宅には、友人である宣伝係の**パトリシアが来ていた。また、ロバート・ケネディ司法長官（ケネディ大統領の弟）も訪ねてきていた。そして更に、17 時ごろ精神分析医であるグリーンソン医師もマリリンの自宅を訪れている。**

その後ロバート・ケネディ司法長官が帰り、18 時ごろパトリシアが帰り、グリーンソン医師も 18 時 30 分ごろ帰り、来客は全て帰った。

マリリンは 20 時ごろ寝室に入った。ここで一度電話をかけている。マッサージを呼ぼうと、いつものマッサージ師のところへ電話したのだ。しかし不在だったらしく受けたのは留守番の者だった。「酔っぱらった感じの女性から電話がありました。」と留守番の人は後にこのマッサージ師に報告している。

この電話を最後に、午前3時30分までの約7時間でマリリンに何かが起こり、マリリンは遺体となって発見された。

▼不自然な自殺

死亡確認から5日後、検視結果が発表された。**死因はバルビタール剤（睡眠薬の一種）の過剰摂取による急性中毒である。**彼女の血液100グラムの中から4．5ミリグラム、肝臓から13ミリグラムのバルビタールが検出された。**「自殺の可能性が高い」とも発表され、この結論が現在でも公式な見解となっている。**

バルビタール自体はエンゲルバーグ医師から処方されたもので、エンゲルバーグ医師はマリリンに50錠入りのビンを与えたという。だがマリリンの部屋にあったビンの中には3錠しか残っていなかった。

ここまでの事実であれば、マリリンが自分の意思でバルビタールを大量に飲んだ自殺と考えられる。

しかし後の調査によれば、エンゲルバーグ医師が50錠を渡したというのは間違いで、薬局の記録によると、25錠となっていることが判明した。

また、ロス検視局では、死因はバルビタールとなっているが、**その朝検視官が彼女の胃を調べたところ、バルビタール服用の際の屈折性結晶は検出されなかった。また、消化器官や腎臓にも薬を飲んだ痕跡が残っていなかった。**

バルビタールを飲んで死に至るには少なくとも52錠、多ければ89錠が必要で、**これだけの量を飲んで、胃や消化器官に何も残っていないということはあり得ないという。**

それに、バルビタールの飲み過ぎ特有の症状である引きつけも起こしておらず、マリリンは身体をまっすぐにして横たわっていた。

つまりマリリンは、バルビタールを飲んだのではなく、別の手段で身体に入れたということになる。考えられるのが注射であるが、注射器などは部屋からは発見されていない。遺体にも注射の跡はなかった。

また、この他にも自殺にしては不審な点が多くある。

遺書が見つからなかったこと、寝る前には必ずカーテンを閉めて寝る習慣があったのに、その日に限ってカーテンが開いていたこと、裸で寝ることなどなかったマリリンが裸で横たわっていたこと、彼女の電話の通信記録が失われていること、日記の代わりに使っていた赤い手帳がなくなっていたこと、などである。

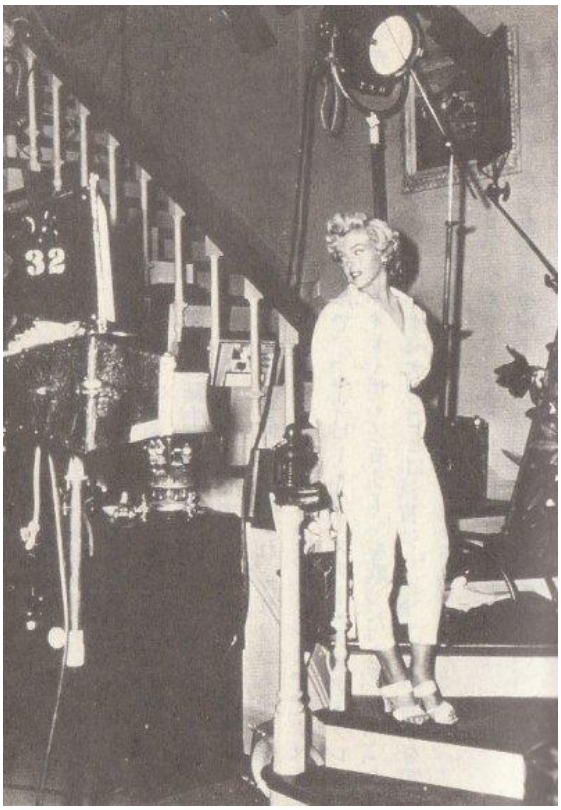
また、動機に関しても不明で、確かにこの時期、わがまま放題で精神的に不安定だった彼女は撮影中の映画の役を降ろされていたものの、監督が替わってから再び 50 万ドルで再契約が成立しており、数週間後には撮影が再開されることになっていた。そのような時期に自殺に走るとは考えにくい。

▼他殺ならば殺される理由があったのか

●ケネディとの出会い・深まる関係

マリリンが殺害される理由があったとすれば、それは仕事上のことではなく、私生活に原因があったとされる。**その際に重要な要素となっているのは、ジョン・F・ケネディ大統領と、その弟ロバート・ケネディとの、２人との不倫関係が大きく関わってくる。**

撮影の合間



いまだにファンの多いマリリン・モンロー

マリリン・モンローは 1950 年代に「紳士は金髪がお好き」「億万長者と結婚する方法」などでトップスターとなった。マリリンの輝きが絶頂を迎えていたこの時期、**マリリンは、後（のち）の大統領であるジョン・F・ケネディと知りあうこととなった。**

紹介者はピーター・ローフォードで、彼はケネディの妹・パットの夫であり、また、俳優でもある。彼が、ロサンゼルス・サンタモニカ海岸のビーチハウスで、ケネディとマリリンを引き合わせたのだ。

初めて出会った時から2人は一気に仲を深め、マリリンはたちまちケネディに夢中になっていった。ただ、ケネディの方には妻がいたので、こちらは不倫ということになる。もちろん、ケネディは、マリリンとの関係で刺激的な日々を送りながらも、妻と離婚までしてマリリンと結婚しようという気はなかった。

世間にバレないように、2人が合う場所としては、紹介者であるローフォードのビーチハウスを主に使った。ケネディが大統領に就任した後は、ニューヨークのカーライルホテル内にある大統領専用のペントハウスで会うようになった。

このペントハウスは完全に外部の者をシャットアウト出来る理想的な場所であり、大統領の側近でさえ、ここに頻繁（ひんぱん）に出入りするのが誰なのか知らないような場所だった。

1960 年の民主党大会の二日後、ケネディとマリリン、そしてローフォードは、レストランで食事をしていた。会話の最中、ケネディはテーブルの下でマリリンの身体を触りまくり、スカートの中に手を突っ込んだ時、彼女がパンティをはいていないことに気づいた。ローフォードは後でこういった話を聞かされて、ケネディとマリリンの関係がかなり進んでいることを知った。

また、２人で大統領専用機で旅行したこともあり、日が経つにつれ、マリリンはいつしか、ケネディと結婚したいと本気で思いつめるようになった。

頻繁に会っているにも関わらず、しばらくの間２人の関係がバレなかったのはマリリンの変装のおかげである。顔の半分くらいを隠すようなサングラスに地味な服、カツラなどで完全に別人となっており、周りの人も彼女のことをローフォードの秘書くらいにしか思っていなかった。

●破局

しかしだんだんとシークレットサービスや FBI に怪しまれ、間もなく２人の関係は突きとめられてしまう。**両組織はマリリン本人の調査も進め、この頃マリリンが睡眠薬中毒とアルコール中毒で精神科の病院に入退院を繰り返していたことも調べ上げた。**

マリリンはケネディに夢中になる一方であり、ホワイトハウスに電話をかけたり手紙を送ったり、果てはケネディ夫人にまで電話してケネディと離婚してと頼むほどだった。

そんなある日、FBI のフィーバー長官からケネディ大統領に対して警告が発せられた。「**２人が会う時によく使っている、ローフォードのビーチハウスにマフィアが盗聴器をしかけ、２人のセックスを録音している**」「**マリリンとはもう会わない方がよい**」、**という情報だった。**

マフィアたちがケネディ大統領の私生活や、マリリンとの不倫を調べていた

のは、大統領を脅（おど）すネタを探していたためである。

ジョン・F・ケネディが大統領になり、そしてその弟のロバート・ケネディが司法長官という役職についてからは、彼らはマフィアの取り締まりをかなり強化した。大統領の私生活での秘密を握り、これをネタに、取締りから逃（のが）れるような取引に持っていこうという意図があったらしい。

一方、ケネディの方は、マリリンに対する熱が冷（さ）めつつあった。マリリンが精神科の病院にお世話になっていることや妻に電話をかけたこと、そしてこの情報も大きな要素を占め、ケネディはマリリンと別れることを決めた。

5 月 19 日、ケネディはこれを最後と決めて、いつものカーライル・ホテルの部屋でマリリンと会った。この日は日中、ニューヨークのマジソン・スクエアガーデンで、民主党員1万 5000 人が集まり、ケネディの 45 歳の誕生日パーティが開かれた日でもあった。

マリリンもこのパーティに招かれており、パーティの後、これが最後となるとも知らずにマリリンはケネディとの約束の部屋に入っていき、いつもの甘い時を楽しんだ。

●ケネディの弟・ロバートとも不倫関係となる

あの夜を境として、ケネディはマリリンを避けるようになった。態度を豹変（ひょうへん）させ、急に冷たくなったケネディに対してマリリンは怒りが爆発した。

何度もホワイトハウスに電話をかけ、手紙も何通も出したが、ほとんど無視のような状態である。**怒りが頂点に達したマリリンは、「これまでの２人の関係をマスコミにばらすわ！」と言い始めた。**

脅しにかかったマリリンに対し、ケネディは弟のロバートをマリリンの元へ差し向けた。もちろんマリリンの説得のためであるが、結果は説得とはまるで違う方向へと向いてしまった。

ロバートとマリリンはそれまでは挨拶をする程度の仲でしかなかったが、ロバートがマリリンの家を訪れた時、彼女は嘆（なげ）き悲しみ、その姿は本当にかわいそうで、ロ

バートは同情してしまい、翌日もマリリンと会い、その日の夕方にはすでにかなりの仲となり、そのまま夜を一緒に過ごして体の関係となってしまった。

ロバートとも関係を持ったマリリンは、今度はロバートのいる司法省に電話をかけるようになった。そして相手かまわず「ロバートは私と結婚の約束をした。」と口走るようになった。それは、元々の相手である大統領ジョン・F・ケネディと、その弟ロバート・ケネディとの区別さえつかなくなってしまったかのようだった。

行き過ぎの行動に、だんだんとロバートもマリリンを避けるようになっていった。

ロバートにも敬遠され始めたマリリンは、再び不安定な精神状態となっていき、孤独感と悲しみ、寂しさの中で日々を過ごすようになった。

「ひどい人たち・・人を利用するだけ利用しておいて、後はゴミのように捨てるなんて・・。」そう言いながら絶望状態となったマリリンは更に睡眠薬に頼るようになってしまった。

失恋の悲しみと酒、睡眠薬が度を過ぎるほどになってしまい、仕事においてもこの時には自分の出演映画「女房は生きていた」の撮影は始まっていたのだが、自分の出番になってもセリフもろくに覚えておらず、しゃべってもろれつがまわらず何を言っているのか聞き取れないような状態となってしまった。

心配したローフォードは「このままでは女優生命が終ってしまう。」と警告したのだが、マリリンの状態は変わらなかった。

そして間もなく決定的なことが起こった。**あまりの彼女の態度に腹を立てた製作会社が彼女を役からはずし、この映画は撮影中止となったのだ。**

ケネディ兄弟たちとの関係だけではなく、仕事までも失ってしまい、精神的にボロボロとなったマリリンは、家にこもって酒を浴びるように飲むようになり、ひたすら泣いて過ごす日々となった。

▼死の直前の出来事

ローフォードはマリリンを何とか立ち直らせようと、自分たち夫婦と一緒に旅行に誘った。2回ほど行った旅行の最中でもマリリンは酒を大量に飲み、睡眠薬も多用した。マリリンの気晴らしに、と思って計画した旅行だったが、結局マリリンの身体のことを心配して旅行は途中で中止せざるを得なかった。

ローフォード夫妻との**2回目の旅行が終わって数日後、マリリンが死亡する2日前のことであるが、マリリンは、ケネディの弟ロバート・ケネディがサンフランシスコの近くに来ていることを知った。**

すぐにロバートに電話し、「今すぐ会いに来て！」と電話口で狂ったように叫んだ。だがロバートも予定は詰まっており、家族と来ているのにそのようなことが出来るはずがない。

相手にせずに断ったがマリリンは食い下がり、どうしても会いたいと言う。**強引に口説き落とされて、ロバートは結局会いに行くことになった。**

ロサンゼルスまで飛び、そこからはヘリコプターで映画製作会社の広場まで飛び、ローフォードに迎えに来てもらって2人でマリリンの自宅を訪れた。2人が家に到着したのはマリリンが電話をかけた翌日・8月4日の14時ごろだった。家にはマリリンの他に、友人である宣伝係のパトリシアも来ていた。

2人で彼女の家に入ったが、ローフォードは気を使って一人だけすぐに外に出た。**しかしローフォードが外で立って待っていると、中からケンカをする声が聞こえてきた。ローフォードはすぐにまた家の中へと入ってみた。**

ロバート・ケネデイが「すぐに帰らないといけない。」と言ったことから「午後

いっぱい私といると約束したくせに！」とマリリンが逆上している。

ヒステリーはどんどんひどくなり、

「明日の朝一番に記者会見を開いて、ケネディ兄弟にもてあそばれて紙クズみたいに捨てられたことを世間にバラしてやる！」

と叫んだ。

ロバートもこれには頭にきて
「俺たち兄弟に指一本でも触れてみろ！タダじゃおかない！」と言い返した。

マリリンは叫びながらロバートに殴りかかり、近くにあったナイフを持ってロバートに切りつけようとした。

ロバートはローフォードと一緒にマリリンに組み付き、床に押しつけてナイフを奪った。その後ロバートは、電話でマリリンのかかりつけの精神科医であるグリーンソン医師を呼んだ。グリーンソンはすぐに駆けつけ、マリリンに鎮静剤を注射した。時間は 17 時ごろになっていた。

それからロバートとローフォードは帰り、グリーンソン医師も 18 時 30 ごろ帰っていった。この時点で友人のパトリシアも帰っており、マリリンの家には来客は誰もいなくなった。

そしてここからが謎に包まれた時間帯であり、そのまま夜がふけ、午前3時 30 分、マリリンは全裸で遺体となって発見された。

▼真相を語る本

1991 年、マリリンの死から 30 年近くが経って、この事件の真相として、一冊の本が発

行された。**「ダブル・クロス」**というタイトルのこの本は、アメリカマフィアのボスであるサム・ジアンカーナ（故人）の弟・チャックと、その息子サム（故人と同じ名）が書いたものである。

この本によれば、マリリンは自殺ではなく、CIA の依頼によってマフィアに殺されたというのが真相となっている。

※CIA：アメリカ中央情報局（Central Intelligence Agency）。アメリカの情報機関であり、裏の仕事を手がけることから「もう一つのアメリカ政府」との呼び名もある。

警察や軍隊とは全く異なる組織で、国民に知られてまずいような情報の隠滅や証拠物件の抹消、敵国の要人の暗殺、スパイ行為、脅迫、戦時中の捕虜の拷問、情報操作など、闇の活動が多い。

政府からは莫大（ばくだい）な予算と権限を与えられている。存在目的はアメリカの外交や国防のためであるが、秘密の部分が多く、詳細は明らかにされていない。アメリカの裏の部分担当とも言える組織。

２人の政界の大物の愛人となったマリリンは、外部に漏れてはまずいような政界内部のトップシークレットまでも色々と知ることとなり、危険な女となっていた。

例えばマリリンが死ぬ1ヶ月くらい前に、スラッツァーという男がマリリンから以下のような話を聞いている。
「CIA が、キューバの独裁者・カストロを暗殺しようと計画を立てているらしいわ。マフィアの力を借りるみたい。」

現在でこそ、CIA がマフィアにカストロの暗殺を 15 万ドルで依頼したことが 2007 年の文書公開で分かっているが、この当時ではトップシークレットだった。

これは一例として、こういった情報を色々と知ってしまったマリリンは、CIA や政界の者にとっては非常に脅威を感じる女となっていた。

その上で、7 月ごろ（死の1ヶ月くらい前）からケネディ兄弟と不仲になり、**「何もかもバ**

ラす」と脅しをかけ始めた。

この「何もかも」に、政界の情報も含まれていたとすれば、それは CIA にとってもケネディにとっても非常にまずいことになる。**CIA は、彼女を始末することに決めた。**

そしてそれをマフィアのボスである**サム・ジアンカーナ**に依頼した。ジアンカーナは、マリリンとケネディ兄弟との関係も知っていた。

元々ケネディ兄弟の父親は、このジアンカーナと親密な関係にあり、自分の息子であるジョン（後のケネディ大統領）が大統領に立候補した時も、ジアンカーナから50万ドルの援助金を受け取っている。

また、この父親が何物かに命を狙われた時に助けたのもジアンカーナである。

ケネディの父親は、ジアンカーナに対して、「いずれジョンの側近として、ジアンカーナの子供も政界に入れてやる」という約束をしていた。**しかしこの約束は実行されることはなかった。**

その上、ケネディ大統領の弟であるロバートは司法長官になると、**ジアンカーナを犯罪者リストのトップに上げ、厳しいマフィア弾圧を行った。**ケネディ家とジアンカーナの親密だった関係は崩れ、ジアンカーナは、ケネディ家に対して激しい憎しみを持つようになっていった。

その上でこの依頼だったので、ジアンカーナはこれを機会にマリリンとケネディ兄弟の関係を世間に暴露（ばくろ）し、あわよくばロバート・ケネディ司法長官をマリリン殺害の犯人に仕立てあげようと画策した。ジアンカーナはマリリン暗殺を OK した。

手下に命じ、マリリンの自宅に盗聴器を仕掛けて機会をうかがった。理想的な日はロバートがマリリンと会うか、家に来た日である。

「ロバートがマリリンの家に 8 月 4 日に行くことになった」という情報が CIA からジアンカーナへもたらされた。これを受けてジアンカーナの組織の殺し屋であるニードルズ・ジアノーラとマグシー・トルトレーラ、それに他2名を加えた、4名の殺し屋チームも現地に到着した。

そして 8 月 4 日、殺し屋たちが盗聴器を通じてマリリンの家の様子を探っていると、ロバート・ケネディが到着したようだった。
激しい口論をしており、間もなく精神科医が来て、ロバート・ケネディが
「注射を打って彼女を落ち着かせてくれ。」
と頼んだ。注射をしてしばらくしてマリリンのヒステリーがおさまったのか、ロバートも医者も帰って行った。

そしてマリリンが寝付いたであろう午前 0 時ごろ、**殺し屋たちはマリリンの部屋に侵入した。マリリンは最初こそ少し抵抗したものの、医者が打った鎮静剤が効いており、思い通りにするのは簡単だった。**

手際よく口をテープでふさぎ、裸にしてベッドに横たえ、バルビタール剤と包水クロラールを調合した強力な座薬を肛門に突っ込んだ。口から無理矢理飲ませるのは、顔や身体に揉みあった証拠を残す恐れがある上に吐く可能性があるため、肛門から入れたのだ。

ほどなくして入れられた座薬は血管から体内に入っていき、マリリンは意識を失った。殺し屋たちはマリリンの口のテープをはがし、身体を拭き、室内の侵入の痕跡を消し去った後、静かに立ち去った。

マリリンの殺害自体は成功したものの、ロバート・ケネディを犯人に仕立て上げるという計画までは実行出来なかった。ロバートが、警察が来る前にマリリンの死を知ってし

まい、すぐにローフォードと探偵オタッシュに指示して、マリリンの部屋から電話番号簿や日記など、自分との関係を示すようなものを総て奪い去ってしまったからだ。

もちろんこの時点ではロバートは、マリリンの部屋に殺し屋たちが来たなどとは知らず、自殺か医者の過剰投与による死亡だと思っていた。

この「ダブル・クロス」に書かれた内容は、事実として公式に認められたものではない。マリリンの死は自殺というのが公式見解となっている。
しかし不自然な点の多い自殺説よりも、この他殺説の方が説得力を持っているのは確かである。真相は依然闇の中であり、今後もおそらくはっきりと判明することはない。

ＮＨＫ　世界のドキュメンタリー より

> アメリカの“セックス・シンボル”といわれたマリリン・モンロー。トップスターでありながら、幼少期のトラウマとメディアが作りあげた虚構のイメージに苦しみ続け、36歳の若さでその生涯を閉じた。番組は、モンローが精神分析医グリーンソンに送った最後の告白テープの内容をもとに、波乱の人生を送ったモンローの心の闇に迫る。（全2回）

元地方検事ジョン・マイナーが、マリリン・モンロー〔本名、ノーマ・ジーン〕と精神分析医ラルフ・グリーンソンについて語ったことをもとに作られた番組

死ぬ２年半前に出会う。以来毎日のように、治療のために面談を重ねた。
マリリンは愛してくれなかった母、男達、結婚と流産のこと、クスリなど、多くの心の闇を語ったという。

夫のアーサーミラーがシナリオを書き、マリリンが主演したのが『荒馬と女』。〔原題「はみだしもの」〕
３人の男と荒馬の中でもがき苦しむこの女性の役は、自分にそっくりだとマリリンは言った。夫は愛と憎しみを表すためにこの役を書いたのだと思った。
夫であり、監督であるアーサーミラーは、酒とクスリで目が充血しているとマ

リリンにいらだちをあらわにした。そしてひどい言葉をなげつけた。「神経質な死にたがり女にはいらいらする」
なぜマリリンを起用したのかと聞かれて、「それは君が女優ではなく、君がホンモノの娼婦だからだ。そのままで演じればいい。役になろうとするな。」
「アクターズスタディオなどに行くな。精神分析は演技のじゃまだ。悩みのないやつに演技などできるか。」

心身がずたずたになっていたマリリンは、映画を楽しめず、出演し演技するのが苦痛になっていた。マリリンの目はうつろになっていた。結婚生活の終わりを感じていた。

『荒馬と女』の撮影がようやく終ってマリリンは叫んだ。「私はずっとマリリン・モンローを演じてきた。偽りの自分を演じてきたのよ。アーサーミラーと結婚したとき、これでマリリン・モンローから解放されると思った。でも現実は同じことの繰り返し。」

クラーク・ゲーブルについて、大好きだったがセックスしたいというのではなく、父親と娘のような愛情で関わりたかったという。

１９６１年１月、離婚。
精神分析医ラルフ・グリーンソンがいないＮＹでは、鎮静剤に頼って部屋に引きこもる生活。食事もとらず、精神病院に収容された。
１２日後退院のときにメディアにさらされ容赦ない質問の嵐。

ロスに戻り、３５歳の誕生日を迎えた。しんどかったが陽気に振舞うことができる状態だった。
死ぬまでの数ヶ月、マリリンは、セックスとクスリに依存するようになっていた。
グリーンソンは、彼女が以前にもまして行きずりのセックスを求めることに危機感を感じていた。公の場で見知らぬ相手と関係をもったと警察から連絡をうけることもあった。
男性に対する恐怖心が、誘惑したいという欲求につながっているのだと、グリーンソンは解釈し、不安に襲われた。

おぼれていくマリリンは、グリーンソンを深い闇の世界に引きずり込んだ。グリーンソンは、医師と患者の関係を越え、夜中でも相談に応じた。自分の子供

をマリリンと交流させ、マリリンを自宅にも泊まらせた。他の患者の依頼を断ってマリリンを優先した。グリーンソンは完全にコントロールを失っていた。

６１年１０月、マリリンはロバート・ケネディ〔既婚者〕と夕食会で出会う。マリリンは酔ってロバートに送られる。その後、マリリンは、ケネディ大統領とも、その弟のロバートとも愛人関係になった。ＦＢＩはケネディ大統領兄弟に、マリリンのまわりにいるマフィアに近づくなと警告した。マリリンは左翼の脚本家とも関係を持っていた。ＦＢＩはマリリンと共産主義者との親交を警戒した。電話を盗聴され、脅され、マリリンはようやくケネディ大統領兄弟と別れるべきだと気付いた。

その後にマリリンが書いた絶望的な詩には「助けて。命が迫ってくる。私は死にたいだけなのに」
と書いてあった。

マリリンは映画でセリフを話すことは怖かったが、無言でできる写真に撮られることは好きだった。気持がふさいだとき、写真を撮られると苦しさが少し減った。

１９６２年２月、マリリンは、撮影所とグリーンソンの家の間に、グリーンソンの家と同じような家を買った。

後１本、映画に出れば、映画会社との契約から解放されると、彼女は希望を持っていた。
そんなとき『女房は生きていた』への出演を命じられた。高額の出演料を勝ち取り、グリーンソンは特別顧問に納まった。グリーンソンとマリリンの関係は、常軌を逸していた。マリリンは昼夜を問わず電話をかけた。
そのころのマリリンはやせ細っていて、多くの人はマリリンはもう終わりだと感じていた。
電話ばかりかかるので、たまりかねたグリーンソンはヨーロッパに出かけた。
マリリンは取り乱し、テープレコーダーを買い、暗い部屋で自分の気持を吹き込んだ。
その告白は、４０年後、ロサンゼルスタイムズに載ることになる。テープを書き起こしたものだった。

映画『女房は生きていた』の撮影は悪夢だった。マリリンは監督が自分を嫌っ

ているといい、自殺すると騒ぎ立てた。
マリリンは撮影所を抜け出し、５月１８日、ＮＹへむかった。ケネディ大統領の誕生祝賀会で歌うためだった。映画会社は彼女を解雇すると脅した。

マリリンは大統領の誕生祝賀会リハーサルをうまくこなせなかった。３０回も歌い、搾り出される歌声は恐怖を感じさせるものだった。だが彼女は、はしゃいでもいた。誕生会で歌うのは名誉だと思っていた。誕生会当日、ロバート・ケネディは妻を伴って参加した。
ショーでは、マリリンはセクシーに輝いていた。ショーの後、ロバート・ケネディはマリリンのそばを離れなかった。だが彼女をホテルのスイートに連れて行ったのは、大統領のほうだった。
その日以降、大統領は彼女と会わなかった。うわさを否定し、関係を清算することに決めたからだった。

マリリンは、撮影所に戻った。彼女はやつれ疲れていた。
プールのシーンで彼女はヌードになったが監督は止めなかった。またとない宣伝になると思ったからだ。
マリリンは言葉を発するのを怖れていた。言葉で伝えられないものを表情で伝えられると思っていた。３６歳になった。
その後もマリリンはヌード写真を撮らせ続けた。若返りの注射も打った。若いうちに死んでいればよかったと思った。
マリリンは、グリーンソンに「精神分析は私を助けてくれない」と訴えた。もう彼に頼りたいとは思わなかった。
マリリンは、グリーンソンと最後のゲームをしていた。
私は私を求めるみんなのものよ。私が一番興奮したのは、１９５４年、朝鮮戦争に行っている兵士達にあいに行ったとき、怒涛のようなどよめきで迎えられた。何ヶ月も女性を見ていない兵士達は、マリリンをむさぼるように見つめた。
マリリンは彼らが喜ぶように、カラダをセクシーに揺らした。
彼女は、自分がないからこそ、私を求めるみんなのものとおもっていた。

大統領の誕生会でなぜあんな演技をしたのかとたずねられ、会場が静かになって私に注目が集まったから。後悔はないわといった。

マリリンは、母のことを話し始めた。
母は死んだのではなく、精神を病んでいた、と。

６２年８月５日　　クスリの過剰摂取で、マリリンが死んだ。
状況は、引退と死を示唆していたので、自殺と推定すると発表された。

マリリン・モンローと、彼女の最後の精神分析医のラルフ・グリーンスンとの物語です。

差しさわりをある場合を除いて、出てくる人物は実名。
そして彼らの話、手紙、論文、インタビュー記事なども、彼ら自身の言葉。
しかし作者はこれを小説・ロマンと言っています。(ノヴェルではなく)

あらすじは amazon からのコピペ。

マリリン・モンローの死の鍵を握る精神分析医グリーンスンとはいったい何者なのか?
謎につつまれた死までの 32 ヶ月を克明に描きつつ、モンローの陥った暗い闇をえぐる
アンテラリエ賞受賞のノンフィクション・ノヴェル。

基本的にはマリリンの死、そしてその後への流れを取りながら、ときに時間が前後する構成になっています。

描かれているほとんどは、マリリンの気持ち、内面に抱えているものを、彼女が実際に口にしたり、書いたりしたもの。
そこに他者のマリリンを語ったものが入る。

そして三人の女性精神分析医の後に、マリリンの死の直前まで彼女を診ていたグリーンスン(男性)の描写が入る。

最初は週二、三回だったカウンセリングが、毎日になり、それも一日に二、三回と言うちょっと考えられないような回数になって行く。

最初は恐らく、社交好きのグリーンスン医師がマリリンを見ることになったのは、「マリリンの心の病を治した医師」の名誉が欲しかったから、と言う部分が大きかったと思う。
しかしマリリンは手ごわい患者で、治療は思うようにはいかない。
そして彼は、自分が支持するフロイト派の治療手法をことごとく裏切って、マリリンにあたるようになる。

彼は父を知らないマリリンの、父になろうとする。
そして自分の家庭に招き入れる、「家庭」を知らないマリリンの為に。

過剰な薬物依存でもわかるように、マリリンは自分が受け入れた者・物に対しては激しく依存する性質だって気がする。
なのでマリリンは激しくグリーンスン医師に依存するようになる。

そしてグリーンスン医師もまた、依存されることに、依存していく。

他の患者の治療に支障をきたす。
薬物依存をやめさせなければと思いながら、結局は自分がマリリンに薬を用意してやる。
バカンスをマリリンの為に切り上げる。

この状況に彼は何とかしなくてはいけないと思いつつ、それが出来ない。

だからこの本が提示する、「精神分析医は治療で患者を殺せるか?」に対しては、私はYES だと思う。

マリリンの死後、他殺説が流れ、あれほど多くの“容疑者”の名が挙がったのを見ると、マリリンの死が都合の良いものだった人は大勢いたと思われるけど、その中で恐らく一番、グリーンスン医師は容易くマリリンを殺せる人物だったと思う。

しかしでは彼がはっきりと自覚、あるいは深層心理ででも、マリリンを殺したいと願っていたのかどうかは、最期まで自分を肯定したグリーンスンがそのことについて何も語っていないので、分らない。

マリリンの行動は、心に抱える不安から来ていた。
それはとてつもなく深く、暗いもので、誰にもどうしょうもなかったのかもと思われる。

ただその素養がまだマリリンがノーマ・ジーンだった時からあったとしては、それをあそこまで引き返せないほどのものにしてしまったのは、女優としての生活だったとも思う。

内に空虚を抱えるノーマ・ジーンは、マリリン・モンローと言う形を作った。
人々は、特に男たちは、それに自分なりの、自分の好みの装飾をつけて、もうマリリン自身が変える事も出来ないほどの強固な「マリリン・モンロー」が出来てしまった。

マリリンはそれを否定しながら、しかし捨て去ることは出来ない。
「マリリン・モンロー」を捨ててしまったら、何もない自分、誰からも認識されない自分になると言う不安から。

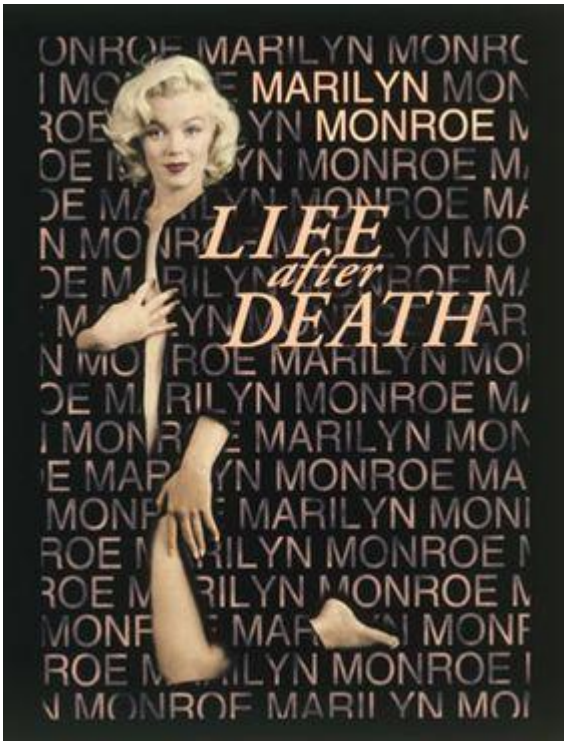
彼女は、空っぽで、人々の望むようなマリリンであり続け、しかしそれに嫌悪していた。

死から四十六年もたった今でも、「マリリン・モンロー」の名は大きい。
彼女の性にたいする放蕩さは、心の病からきていると思われるのですが、どんな男を、どんな風に拾い、どんな風にセックスをしたかを書かれてしまう。

にも係わらず、彼女が抱えていた心の苦しみを、彼女が望むように理解することは、今もって出来ていない気がする。

表紙の彼女はモノクロで、白いシーツの上に横たわっている。
その美しい顔かたち、スタイルに、女性の私でもため息が出る。

その世にも美しい姿態を、彼女自身がちっとも大事にしてないかった、その理由の心を思うと、哀れでなりません。


LIFE
after
DEATH

MM
マリリン・モンロー
最後の告白
Marilyn, The Last Sessions